

1777年のアルフィエーリとロッピオ

——トリノの知識人社会における居心地の悪さ——

菅 野 類

要 旨

イタリア人の悲劇作家、ヴィットーリオ・アルフィエーリが1777年の5月にトリノを離れトスカーナへ向かったのは、イタリア語の表現力を向上させるためだったことは良く知られている。しかし、本稿筆者はその旅のもうひとつの理由が、トリノの知的状況内にあったのではないかと考えている。

1773年、ヴィットーリオ・アメデーオ三世が即位したことをきっかけに、トリノの知的環境は劇的に変化した。伝統的な厳しい統制から解放されたことで、トリノはかつてない文化的活況を迎えたのである。しかし、過度の自由は制限されるべきであるとの保守的意見は存続し、1777年に出版されたベンヴェヌート・ロッピオの『えせ哲学論』により勢いを取り戻す。ロッピオは知的風潮の墮落を警戒し、社会秩序を守るために検閲の重要性を訴えたのだった。アルフィエーリが『専制論』の原案を書き、主にトリノ社会を念頭に置いたものと見られる君主制批判を展開したのも、ちょうどその年のことであった。

これらの対照的な意見がほぼ同時に現れたことは、単なる偶然とは思われない。ロッピオとアルフィエーリは同じ文芸サークルに所属しており、さらにロッピオはアルフィエーリに悲劇の書き方を指導していた。相手の態度と考え方を直接知りうる関係に二人はあったのである。

『えせ哲学論』の出版以降、ロッピオは政府の文化政策に関わっている。これは、トリノにおいて保守的論調が支配的となったことを意味する。一方アルフィエーリは、自由な立場で執筆活動が続けられるよう、祖国との関係を絶つ決意をする。たとえ明確に言及されていないとしても、トリノの知識人社会における居心地の悪さが、アルフィエーリをトリノから遠ざけた要因のひとつであったものと考えられる。

キーワード：アルフィエーリ、ロッピオ、1777年、トリノ、知識人社会

はじめに

6年に及ぶ長いヨーロッパ旅行を終えたアルフィエーリは、1772年5月に祖国サルデーニャ王国の首都トリノへ戻ると、散発的な小旅行を挟みながら5年をそこで過ごすこととなった。一時は放蕩に耽りつつも、複数の文人との交流を通じて悲劇作家として生きる意志を固めたこの時期は、後の作家人生に決定的役割を果たす。そのアルフィエーリが1777年5月に二度目のトスカーナ旅行へ出発した背景には、イタリア語の表現力を高める積極的な動機があったと『自伝』では述べられている。

考え方なり感情なりを的確に表現できる域に私が達していないということ、そしてそれは、トリノでは依然としてあまりにだらしない暮らしを続けており、十分に文学と向き

合ってられないためだと思い知った。そこで私は即座に決意した。考え方を絶えずイタリア風に変えられるであろうトスカーナへ戻ろうと。私がトリノでフランス語を話していたわけではないにせよ、我がピエモンテのお国言葉を一日中聞いたり話したりしては、イタリア語で思考したり執筆したりするのに適さないと思われたのだ。¹⁾

そしてアルフィエーリはその旅行中に突如、国の法律の束縛を離れた執筆活動を決意する。家督を姉に譲りサルデーニャ王国との君臣関係を絶つという大胆な試みによって、その計画は実現を見た。祖国を捨てるという極端な行動に出る意図が初めからあったわけではない。しかし、トリノからできる限り距離を置こうとする意識はそれ以前から準備されていたはずである。1777年の夏に書かれた『専制論』の草稿には次のような記述が見られる。

したがって私は主張する。もし、その者が専制政体において己の知性によりその重圧を感じるも、力の至らぬゆえ払いのけられないのなら、第一の教えにしたがって、彼は暴君とその取り巻きから離れるべきである。そして可能なら、暴君が住む城壁や土地から遠ざかるべきである。…中略…それから、境遇上日々の糧を卑しく稼ぐ必要がないのならば、また、栄光を求める高貴な炎が時代の邪悪さによってまだ完全に消されてはいないのならば、行動の栄光は掴みようがない以上、焦燥感を覚えつつ、発言、著述、思索の栄光を求めよ。

しかし、これらのうちひとつでも死罪となる政体において、どうやって発言し、著述し、思索するというのか？²⁾

他者への教訓という形で書かれてはいても、これが作家活動のためトスカーナへ渡った自身の行動の正当化であることは明白である。そして、「発言、著述、思索」のうちひとつでも死罪となる政体という大げさな表現は、トリノの知的環境に対するアルフィエーリの強い不満の表れと考えられる。とすれば、1777年のトスカーナ行の背景には、文学的向上心とは別に、不快な環境から遠ざかろうとするいわば消極的動機が存在が想定されるだろう。トリノを離れた直後からアルフィエーリの作風がより攻撃的に変化するという流れもあり、こうした不満感がその後の活動に及ぼした影響は無視できない。

ここで注目されるのは、当時のトリノでは、新王の即位を機に知的活動が活発化する一方、行き過ぎた自由を抑制すべしとの保守的論調が高まりを見せていたという点である。こうした緊張状態がアルフィエーリ不満感の背景にあったとは考えられないだろうか。以下本稿では、1777年に出版されたベンヴェヌート・ロッピオの『えせ哲学論』を保守的意見の代表として扱いながら、文化的な意味でアルフィエーリの「脱ピエモンテ化」を促したと見られる、トリノ知識人社会の保守的变化に迫ってみたい³⁾。

1. トリノ知識人社会の様相

知的エリートを冷遇し、国益のためには犠牲にすることも厭わぬサヴォイア王家の伝統的性情は広く知られており、大筋においてこの認識を否定することはできない⁴⁾。ところが、1773年以降のトリノは同国の歴史に類を見ない特殊な状況にあった。「あらゆる社会生活に対する容赦のない鉄のごとき統制⁵⁾」が緩み、それまで押さえつけられていた知的活動が沸騰を始めていたのである。

それは1750年前後から緩やかな兆しを見せていた。自立的な知的活動を抑制しようとする当局の姿勢に変化はない。しかし、外国の新しい知識に触れることのできた一部の人間は、知的好奇心を刺激されてやまなかったのであろう。1757年には、軍人でもあり化学者でもあったサルッツォを中心として「トリノ私的サークル (La società privata torinese)」が発足したのである。主な活動の舞台となったサルッツォ邸は、科学者、文学者、外交官、フリーメーソン会員が集う国際的な知的空間となった。サークルの関心は主に自然科学に向けられたが、人文科学のテーマについて語ることもできる開放的な雰囲気がそこにはあった。

それを助けたのが、サヴォイア王家の歴史でも例外的な存在、文芸を愛するサヴォイア大公、後のヴィットーリオ・アメデーオ三世であった。幼少時の教育をプレーリョ侯爵ソラーロから受けたことは、彼の人格と教養の形成に大きな影響を与えた。大使として各国を巡り自由な知的環境の魅力を感じ取っていたソラーロは、もう一人の協力者フルーリ侯爵ヴィカルデルと組んで、学問に広く理解ある君主の育成を目指していたのである。それに伴い、授業を受け持つ知識人が集められ、皇太子の周囲には知識人の小さな集団が形成された⁶⁾。ガレアーニ・ナピオーネによって「文芸」宮廷と蔑まれつつも、この集団は「トリノ私的サークル」を当初から支援し、時と共にその関係を緊密にする。このサークルが「王室付き (reale)」という称号を得たのも皇太子の働きかけによるものであった。

それでもまだ、カルロ・エマヌエーレ三世と大臣ボジーノの政権下では多くを望むことはできなかった。1760年、皇太子と「トリノ私的サークル」の仲介役をしていたフルーリ侯爵がサークルを公式アカデミーへと昇格させようとした。しかしこの試みは失敗する。既存の王立学校とは別の知的権威が生じることを当局に恐れられたのである。また、サークルメンバーの一人デニーナは、その活動の様子を模して書いたといわれる『オクタヴィアヌス議会』の中で、知識人に疑いの目を向けることをやめて社会の中で彼らを積極的に利用すべきとの意見を盛り込んでいたが⁷⁾、それが聞き入れられた様子もなかった。より自由な知的環境への欲求が日増しに高まっていたとはいえ、政府の側からすれば相変わらずそれは危険な思想の温床でしかなかったのである。したがって、来るべきヴィットーリオ・アメデーオ三世の即位は知識人の大きな期待を集めていた。1771年、バレッティがイギリスから皇太子に意見書を送り、拷問の廃止、異端審問所の廃止、「慎ましき」出版の自由を提言していたのは、その抑えがたき

期待感の表れといえよう⁸⁾。

1773年のヴィットーリオ・アメデーオ三世の即位以降、フランス革命の混乱に巻き込まれるまで「ピエモンテ文化の短き小春日和⁹⁾」が訪れる。定期刊行物、私的サークル、フリーメイソンのロッジが急増し、複数のアカデミーが国家主導で創設・再編されたのはこの時期であった¹⁰⁾。それまでを国外で過ごしていた複数の文人も、新時代への期待感に促されたかのように1773年前後にトリノへと相次いで帰郷している¹¹⁾。この時の帰郷者の一人がアルフィエーリであり、パチャウディ神父とカルーズ神父というアルフィエーリの修行時代に指導的役割を果たす文人もこのカテゴリーに含まれる。総体的に眺めるならば、1773年以降のトリノ社会は、国からの後押しを受けて、かつてない知的活動の繁栄を見たといえる。その実現においては、ヴィンチェンツォ・フェッローネが指摘するように、自由な知的活動への人々の渴望を読み取りそれに応えたヴィットーリオ・アメデーオ三世の功績は大きいだろう¹²⁾。

とはいえ政府の警戒心が完全に解かれたというわけではない。確かに、自然科学や美術は大いに奨励された。しかし、文学や哲学上の議論には相変わらず疑いの目が向けられ、厳格な国家検閲制度がそれを監視していたのである。この点で、出版の自由拡大を求めるバレッティの願いはかなえられなかったことになる。1777年以降、今度は一転して一部の知識人がトリノを離れ始める。アルフィエーリもまたその一人であり、マルコ・チェッルーティはこうした退潮現象の背景に、過剰な期待感の減退や検閲制度に起因する「居心地の悪さ (disagio)」を指摘する¹³⁾。その節目に当たる1777年に、ロッピオの『えせ哲学論』は出版された。同時代の知的風潮の退廃を糾弾し、反権威的な思想・風潮の取り締まりを訴える『えせ哲学論』の登場は、保守的論調の高まりを強く印象付ける。かつてない文化的活況の中で、知的活動の自由を制限すべしとの意見は、その内部から生じていたのである。

2. 「えせ哲学」の脅威

サン・ラッファエーレ伯爵ベンヴェヌート・ロッピオは、トリノ近郊の町キエーリで1735年に生まれた貴族出身の文人で、1749年生まれのアフィエーリとは10歳以上の年齢差があった。「トリノ私的サークル」の活動がロッピオ邸でも行われていたとの記録があり¹⁴⁾、彼が早くから知識人社会で指導的立場にいたことは確かである。歴史研究家カルロ・カルカテッラはこのロッピオを好意的に紹介している。「優美で温和な助言者¹⁵⁾」であり、「人間的・キリスト教的で、正しくまっすぐな認識力¹⁶⁾」を生まれながらに備えるロッピオは、「ピエモンテのモラル作家で最も名高かった¹⁷⁾」のだという。キエーリの寄宿学校で学長を務めた経歴からも、風紀に寄せるロッピオの強い関心は窺える。しかし、反権威的意見の形成を警戒して断固たる検閲の必要性を訴えたロッピオの存在は、知的活動の自由を求める知識人に不吉な影を投げかけずにおかないだろう。

ヴィットーリオ・アメデーオ三世への献辞の中で、ロッピオは『えせ哲学論』の執筆の狙いを説明する。それによれば、「かくも健全で輝かしい思想とは、違うどころではなく正反対な¹⁸⁾」思想、すなわち「えせ哲学」の害を詳述し、彼らとの戦いに備えることが同書の狙いである。ロッピオによれば、「真の哲学」とは「知識への愛」に基づいた知的活動であり、人々の思考と行動を正しく律する役割を担うものと定められる。

真の哲学とは、知識への愛にほかならず、すべては人間の知性と心を正す二つの目的を目指しています。正しく思考を働かせ、正しく行動し、真実を見極めそれを求めること。これが真の哲学の教えの目的であり、その徒の栄光なのです。したがって、真の哲学とは何か特別な学問のことではないことは容易に分かります。¹⁹⁾

しかるに、「えせ哲学」は「自尊心 (orgoglio)」をその活動の基礎に据える。「自尊心」とは、「自分自身への深い尊敬の念で我々を満たしてくれる²⁰⁾」甘美で危険な情念であり、「えせ哲学」を受け入れた人々が既存の権威や真実を軽蔑したり拒絶するのは、相対的に自らの権威を高めようとする卑しい欲求のためである。政治秩序、市民道徳、信仰の正当性に懐疑の目を向けさせる「えせ哲学」は、社会の安定を脅かす知的風潮と位置づけられる。

…大げさな演説が大多数の人々の心に与える影響とは、祖国の法に対する不満、反感、気難しさでしかありません。社会生活に必要な主だった美德への軽蔑であり、他の政府がもたらすであろう想像上の幸福に対するうわごとめいた憧れであり、市民の従属というくびきを、たとえそれが甘美で、正当で、必要この上ないものであっても、払いのけようとする不合理かつ無遠慮な欲求でしかないのです。²¹⁾

…ともあれ、えせ哲学はこのように、賢人にとってはすべての国が祖国なのだと主張し、祖国愛と、自国政府への尊敬の念を弱め、冷ましてしまうのです。この尊敬の念こそが、人民の幸福、王座の輝き、国家の安全が拠って立つ堅固な基礎の一つでありますのに。²²⁾

「くびき (giogo)」という言葉が象徴的に示しているように、人民は家畜のごとく繋がれ、養われている。しかしそれは、奴隷のように蔑まれた状態ではなく、善意の権威に守られた幸福な状態なのである。したがって、現状に疑問を抱いたり不平を洩らすことは、幸福を授けてくれる善意の手を払いのける子供じみた気難しさと同じであり、理性ある人間ならば慎むべきとされる。当然ながら、ロッピオが想定する善意の秩序とは、君主制国家の秩序のことであり、つまるところサヴォイア王家体制のことである。

市民の自由を破壊するこれらの悪徳が、君主政体にも共和政体にも共通しているという事は、誰しもが知っていることでしょう。ですが、…中略…貴族政体の方が、民主政体よりもこれらの不都合は少ないに違いありませんし、より遠くから物事に備え、効果的に動き、対処することができるという違いはあります。しかし君主政体においてはこれらの危険はなお少なくなります。²³⁾

しかし、共和国においてよりも、君主国においての方が公平で良い法が得られやすいというのは常に真実でありましょう。というのも、主人は一人なのでですから、抑えなければならない情念は一人の情念だけなのです。しかもその情念といいますのが、高度な教育、輝かしき位の高さ、完全なる権力、彼を王座へ上らせた至高の管理者の特別な光のゆえに、弱き私人が通常持っている無数のつまらぬ私利私欲から離れている一人の人間の情念なのです。一方共和政体においては、それらの私利私欲が祖国の立法を傷つけ、弱める可能性があるのです。²⁴⁾

そして、昨今の「えせ哲学」にいつその警戒が必要なのは、印刷技術の発達のためである。先進の印刷技術と結託した「えせ哲学」の影響力と伝播力は過去の比較にならない。たとえ一人の「えせ哲学者」が雑踏を離れた孤独な生活を送っているとしても、著作物の出版によって、彼は「その心と共に雑踏の中で暮らしているかの如し²⁵⁾」となり、放置は許されない。今や一人の隠者がたくましくする妄想からも、社会秩序の崩壊が生じかねないのである。

…一見些細に見える誤りが、その結果どのようなになるのか見通しがつかないのです。…中略…歴史には、些細な始まりから大きな動乱の生じた例がふんだんにありはしませんか？²⁶⁾

危険とは将来の害であり、害とは避けられなかった危険のことです。政治的研究に危険が多いということは、それだけ害も多いということが理解されるでしょう。²⁷⁾

既存秩序の動揺につながる動きは、可能性の段階ですべて排除されるべきだというのがロッピオの考え方であり、市民社会の自主的な知的活動に対する信頼はない。現状こそがベストなのであり、変化はすべて悪なのである。そして、個々人の内面をコントロールすることはできない以上（可能ならばそれが望ましいのであろうが）、ロッピオは断固たる検閲の実行を呼びかける。

国家の良き秩序に留意する君主なり裁判官は、かくのごとき無秩序を未然に防ぐ権利のみならず、そうすべき明確な義務を負っているのです。そして、最も迅速かつ有効な手段によって、市民の平穩の敵として、聖域の横柄な侵略者として、これらの反抗的で強情な精神を抑制してよいのですし、そうすべきなのです。²⁸⁾

そして政府にはやはり、100の目を開けていていただきたいのです。誤りに取り込まれた本屋に、法の敵罰という処置を加えていただきたいのです。²⁹⁾

一見過剰とも思えるロッセオの危機感は、「えせ哲学」の悪影響が国中に広まりを見せている現状によって掻き立てられているように見える。ただし、もともとが教養に乏しく従順な性質の下層民は問題ではない。教養と好奇心を備えた人々こそが、「えせ哲学」に唆されて批判精神を身につけやすいのである。

経験からうかがい知れるのは、様々な欲求、現状への不満、変化への嗜好、驚異への関心は、平凡で見識の狭い精神よりも、鋭敏で先見の明がある知性のほうに宿りやすいということ。³⁰⁾

そして、物質的に満たされた享樂的な暮らしが、「えせ哲学」信奉者の野放図な性質を増長させている。

まったくもって、えせ哲学の原則と、楽しく快適な日々のみを送ろうとする人々の暮らしぶりは、見事に一致してはいませんか？ こうした暮らしの中では、情念が命令を下し、理性がそれに仕えます。あらゆる欲望に対してはけ口が求められ、欲望が満たされれば新たな欲望が求められます。³¹⁾

教育者としての経験があるロッセオらしく、人々の乱れた風紀の根源には「現代の紳士教育(moderna educazione signorile)³²⁾」の不備があると指摘する。子供の頃から適切な教えを与えられず、模範を示されず、監視をされず、矯正もされなかった若者は、その不適切な教育の産物として「早熟の狡猾さ、キリスト教の義務についてのあいまいな観念、完全な独立を好む性質、あらゆる楽しみへの欲求³³⁾」を受け取る。その彼らが世間に放り出されると情念の奴隷となり、各人の思い上がりを正当化してくれる「えせ哲学」に手もなく絡めとられてしまう。つまり、人並み以上の教養と財産を持ちながら、安逸な暮らしに浸ることを許されている貴族の子弟が、「えせ哲学者」の予備軍として憂慮されているのである。「我々のモラルを守るためアルプスが置かれているが、それも空しく、伝染性のおぞましい風潮はこちら側でもすでにひっ

そりと広まっている³⁴⁾」と述べられているように、啓蒙思想の流行がロッピオの危機感を刺激するひとつの現実ではあったが、それ以前に風紀の乱れが根源の問題であった。

つまり、不品行がえせ哲学の導きとなるのであり、その逆ではないということです。³⁵⁾

こうして、トリノの知的風潮についてロッピオが抱く危機意識の全体像が見えてくる。彼の目の前には、国の将来を担うべき貴族の若者が甘やかされ、啓蒙思想にたぶらかされ、秩序に反抗的な有害分子へと墮落する光景が広がっている。

当時のトリノ社会に見られた反権威的風潮の発生は、良くも悪くも自由な知的環境の産物と言えるのだろう。しかし、トリノの知識人社会が複数の対立意見を受け入れるだけの成熟を手に入れていた、というわけではなかった。新王の即位後、数年を経て出版された『えせ哲学論』には、急激な社会の変化に対する保守層の戸惑いと危機感がありありと読み取れる。開放的な雰囲気の中で批判的意見が生まれることに、そして現状に飽き足らず更なる自由が求められることに、保守層が不安を覚えたであろうことは想像に難くない。そして、『えせ哲学論』出版の翌年にロッピオが大学改革実行委員に選ばれ、まもなく検閲係へ任命されたのは単なる偶然ではないだろう。これは、政府も同じ危機感を共有しており、数年来の活発な知的活動に歯止めをかけ始めたことを意味する。一方同じ頃、トリノを離れたアルフィエーリは、ロッピオとはまったく逆の立場からトリノ社会への不満を吐露していた。

3. アルフィエーリの『専制論』

『専制論』執筆の経緯は『自伝』に詳しい。きっかけは、シエナでの滞在中に友人フランチェスコ・ゴリー・ガンデッリーニに薦められたマキャヴェッリの読書であり、その「独創的で含蓄のある語り口にとりつかれて、数日後には、ほかのあらゆる勉学を放棄せねばという気になり、さらには靈感を受けたかのように、一息で『専制論』二巻を書き上げねばならぬと感じた³⁶⁾」のだという。『専制論』の草稿には、1777年7月29日に書き始められ、同年9月1日に中断されたとの記録があり、それが「一息で」書かれたことを物語っている。君主政体の原理や諸制度を強く非難するその内容は、執筆の勢いそのままに攻撃的であり、中には君主殺しを肯定するかのような文言まで見られる³⁷⁾。

多くの人々が暴君のため未だに惜しまず投げ出している命を、なぜ彼らは、もっと理性を働かせて、同じだけの美德を振るって、暴君からその命を奪うために用いないのだろうか？³⁸⁾

『専制論』によれば、「君主政体 (monarchia)」とは「人々の追従心や恐怖心によって与えられた肩書き³⁹⁾」であり、「専制政体と同義語ながら今はさほど憎まれていないこの名前は、実質上絶対的な主人である王を受け入れさせるために、そして臣民に対しては、彼らが絶対的な奴隷ではないと信じ込ませたり、あるいは欺いたりするために発明されたように思われる⁴⁰⁾」のだという。つまり、君主政体は名前を変えただけの専制政体に過ぎないのであり、その二つは同一視される。

そして、君主政体の名を借りる専制政体の原理は、統治者と被治者相互の恐怖心に求められる。被治者は、苦しみの限界が「抑圧者の意思と気まぐれ⁴¹⁾」以外にないことに恐怖し、服従する。暴君もまた、自分の権力が被治者の心に引き起こす憎しみを想像し、恐怖する。暴君の性格が過度に攻撃的なのは、その憎しみから生じる反抗を未然に防ぐためであると説明される。君主と臣民を結びつける絆は、もはや君主制擁護論者が喩えて用いる牧人と羊の関係ではない。そもそもその牧人なるものが人間である以上、恐怖心や欲得といった情念から逃れられる保証はない、というのがアルフィエーリの考え方である。

また、君主政体は君主とその周辺に位置する野心家の欲望が満たされるばかりの社会だと断罪される。「専制政体」の人々は、「暴君」に尽くすことで好意を得る。しかし、「たった一人の暴君は世間とは異なる利害関心を持つかもしれない、ほとんど常にそうである⁴²⁾」のだから、それは「暴君」個人の情念を満たしているだけで、公益に直接貢献するものではない。公共の福祉を「暴君」が望まぬ以上、「暴君」を代表する大臣とてそれを望むはずがない。そして、軍隊と宗教は「専制政体」を維持する手段としての側面が強調される。軍隊とは暴君らの「残虐非道の実行者⁴³⁾」であり、いかなる形であれ「暴君と専制政体の腕であり、バネであり、基礎であり、一番の抛り所⁴⁴⁾」としての本質に変わりはない。キリスト教も「服従のみを美德と呼び、暴君を神に近づける⁴⁵⁾」ことで、世俗権力の絶対性を人々に受け入れさせることに一役買っている。ロッセオは人民を幸福な家畜のように形容していたが、アルフィエーリも同様に人民と「暴君」の関係を動物とそれを愛する主人の関係になぞらえる。もちろんそれは肯定的な意味ではない。従順さと有益さに応じて与えられるだけの愛情は、「人類全体へのさらなる侮辱⁴⁶⁾」として嫌悪される。

『専制論』を通してアルフィエーリは君主制への不信感を露にする。それは君主個人の情念を中心に動く社会であり、権力のおこぼれに与ろうとする野心家とその周囲に群がり、大多数の臣民は恐怖に打ちひしがれ順応を余儀なくされる。個人の幸福も社会の幸福も顧みられない。軍隊が外的な力として、宗教が内的な力としてその秩序を固定化する。以上のような悲観的分析は、ヨーロッパ各地を巡った際の様々な見聞にも基づいてはいるのだろうが、『専制論』執筆直前の5年間を過ごしてきたトリノ社会への批判としての性格は逃れられないだろう。実際、「私は単独暴君の専制政体の許に生まれ、暮らしてきた⁴⁷⁾」と述べられている箇所があり、アルフィエーリが執筆時にトリノ社会を強く念頭に置いていたことは間違いない。

したがって、統治者の善性に対する絶対的信頼を要求するロッピオら保守層の主張に、アルフィエーリは欺瞞のにおいを嗅ぎ取り反発するだろう。ロッピオが理想とする安定した秩序は、アルフィエーリにしてみれば統治者と被治者の恐怖心を原理とする不健全な社会であった。その社会を盲目的に受け入れることは、統治者の悪意に自ら進んで弄られる愚を冒すに等しい。一方、ロッピオからすれば『専制論』に見られる君主制への反発は「えせ哲学」の悪影響であり、善意の手を「払いのけようとする不合理かつ無遠慮な欲求」としか受け取れないだろう。『えせ哲学論』の以下の文章はまるでアルフィエーリに向けられた叱責であるかのようである。

さて、こうした悪口で人々は何を求めているのでしょうか？ 人類の社会を相互の疑惑に貶めたいのでしょうか？ 政府と民衆を敵対するように唆したいのでしょうか？ お互いが恐怖心から疑心暗鬼に駆られるように仕向けたいのでしょうか？⁴⁸⁾

両者の隔たりは大きく、容易なことでは埋まりそうにない。これらの対立的意見が同じ年に登場したことは、トリノ社会のあり方を巡る議論が当時盛んに行われていたことを窺わせるものとして興味深い。同様の問題意識を抱えていたのはアルフィエーリとロッピオに限ったことではなかったろう。しかし、二人の意見を比較することの興味深さは、そうした象徴性を浮かび上がらせることにのみあるのではない。当時の二人には直接の交流があって、互いの態度と考え方を知りえる状況にあった。つまり、二人とも相手を意識しつつ自分の考えを膨らませていったように見受けられるのが、なおのこと興味深いのである。

4. アルフィエーリとロッピオの交流

執筆活動の自由を求めてトリノを捨てたアルフィエーリと、そこに留まり検閲の任に就くこととなったロッピオの立場の違いからすれば奇妙にも思われるが、当時二人には悲劇作家見習いとその指導者という関係での交流があった。アルフィエーリの『自伝』によれば、二人の交流の始まりは1776年に遡る。

そうしてる間に、無二の友トンマーズ・ディ・カルーズ神父がポルトガルより帰国していた。彼の予想に反して私が文学の世界にのみこみ、悲劇作家になるという厄介な目論見に執着しているのを見て、彼は言い尽くせぬほどの深い愛情と思いやりをこめて、多くの言葉で私を励まし、助言し、助けてくれたのだった。その年に知り合った博学極まりないサン・ラッファエーレ伯爵（ロッピオのこと：筆者註）も同様にしてくれた。⁴⁹⁾

1776年12月に発足した文芸サークル「サンパオリーナ」が、二人の出会いの場ではなかっただろうか。ロッピオはその創設者の一人であり、アルフィエーリは参加者の一人だった。上掲の引用部分からは、ロッピオもまた他のメンバー同様に「深い愛情と思いやり」を注ぎつつ若き悲劇作家を指導していたかのような印象を受ける。しかし実際にはそこまでの仲ではなかったと思われる。アルフィエーリは1777年の5月にトリノを離れてしまうが、その後ロッピオの名は『自伝』にも、現存する書簡にも登場しない。つまりその半年程度で費えたはかない交流ということになる。第二に、ロッピオに関するもうひとつの記述が『日記』に残されているが、そこから垣間見える二人の関係は、客観的に見て師弟のそれにはあたらない。以下がその『日記』の一部分（1777年4月17日付）である。

サン・ラッファエーレ伯爵に貸していた原稿が届けられたのは、私がアリオストを読んでいるときだった。運び屋は何の知らせも持ってこず、上述の伯爵が悲劇を聞きに私の許を訪れると言ってくれないことに、私は心中かすかな怒りを覚えた。何日も前に聞きに来てくれると約束したのに。

だが、伯爵にそれを思い出させるのは我が自己愛にとってあまりにつらいことだった。だから口には出さなかった。それよりも、私が頭で巡らせていた考えは、伯爵の故意なのか偶然なのか分からぬ物忘れを私が気にしていると、どうやったら彼に悟られないかということだった。⁵⁰⁾

確かにこれはアルフィエーリがロッピオから指導を受けていたという『自伝』での記述と合致している。しかし、そこからは二人を隔てる微妙な距離感も見えてくる。意図的であれ、意図せざるものであれ、悲劇を聞きにくるという約束の反故は、アルフィエーリを軽視する態度の表れであろう。その約束自体、単なる社交辞令だった可能性もある。アルフィエーリの側でもロッピオに心服している様子はなく、頭を低くして教えを請うという意識よりも、トリノの代表的文人から評価を得ようとする栄誉心のほうが強いように思われる。約束を破られたことに腹を立てているのも、冷淡なロッピオの態度にそうした自負心を傷つけられたためではないか。文芸愛好家同士の付き合いという体裁はとりつつも、互いにわだかまりを抱えながら接していたというのが実態だったのだろう。それも二人の考え方の隔たりを思い起こせば無理からぬことと思われる。特にロッピオの側からしてみれば、帰郷前後のアルフィエーリが示していた生活態度と思想的傾向は「えせ哲学者」予備軍の特徴そのものであり、心温かく迎え入れることのできる相手ではなかったのである。

5. アルフィエーリの「えせ哲学者」症候群

例えば、ロッピオは当時トリノで流行していた享樂的なサークル活動にはっきりと苦言を呈している。

賢明かつ巧みに組織されたサークルが有益であることはもちろん、必要であることも分かっています。したがって、そのような誉れは次のようなグループに与えられるべきなのです。つまり、義務から解放された時間に、分別のある人々が集まって、許された穏やかな気晴らしをするようなグループ。…中略…しかし、その他悪事の集会に対してそのような誉れを与えることがあってはなりません。…中略…ずうずうしい連中が大変重大な秘密を暴露し、中傷者がカラスのような悪人を許し鳩のような善人をこき下ろし、悪徳の輩が立派な人々をあざ笑い、彼らの方が恥ずかしさで顔を赤らめてしまうような、そんな場所には。⁵¹⁾

帰郷直後のアルフィエーリが自宅で開催したサークル活動がまさしくこれに該当する。「偏見なし (Sansguignon)」と呼ばれたそのサークル⁵²⁾にはアカデミー時代の旧友が集い、楽しむことだけを目的とした活動が行われていた⁵³⁾。「トリノ私的サークル」や「サンパオリーナ」とは性質が違うことは一見して明らかである。「偏見」を持たぬ若者が集うだけに、そこでは既存の権威を嘲弄する発言が多数飛び交っていたことだろう。アルフィエーリがサークル活動の一環で書いたとされる文章では、政府関係者の無能や横柄さが風刺の対象となっており、そのことを裏付けている⁵⁴⁾。

また、アルフィエーリが重ねた恋愛上の不品行も、自身の悪印象をトリノ中に知らしめずにはおこななかっただろう。特に有名なのが、ヨーロッパ旅行中のロンドンで起こした不倫の挙句の決闘騒ぎである⁵⁵⁾。しかも不倫の相手は「トリノ私的サークル」のメンバー、ジョージ・ピットの娘ベネロプであった。これがサークル内で話題にならなかったはずはない。したがって、1776年に直接の知り合いとなる以前から、ロッピオがアルフィエーリの名前と問題行動を聞き及んでいたのは確実である。トリノに戻ってからも、アルフィエーリはプリエ侯爵夫人ガブリエッラ・ファレッティとのふしだらな恋愛関係に陥っており、情念に組み伏せられる愚かな若者としてのイメージは決定的となる。アルフィエーリがロッピオの指導を仰いだのは、侯爵夫人との関係が清算され文学的野心に目覚めた後のこととされているが、そうした「改心」後の時期においてさえも、ロッピオとその周辺を納得させるだけの変化は示せていなかったのではないか。文学的野心を実現するためのトスカーナ旅行を間近に控えた1777年4月、アルフィエーリは依然として浮ついた心のまま「無為」の日々を送っている。当時の様子は『日記』で次のように記されている。

4月19日

…トスカーナ、私の頭の中ではすでに何人もの女性をのぼせ上がらせている国。分別あるいはエスプリを備えた人々の敬意を得たことになっている国。

今朝は何にも集中できないので、お昼まで外出していた。友人と共に、通りから通りへ、店から店へと散歩をしながら。そんな私の顔には、無為が刻まれていた。時間をつぶし、自分自身を欺いた。…略…

4月20日

一日中つまらなかった。自分の具合が良いのか悪いのかも分からない。…中略…昼食にはサークルの紳士たちを何人か招いた。他にもない、我が新作悲劇への賛辞を今一度聞くためであった。しかし私は寛大であった。彼らに真実を要求し、それを言うように求めたのだから。…略…

4月21日

無為の習慣は行動の習慣より早く身につくというのは本当である。昨日一日をたった数行読んだだけで終わらせたら、今日という日は一行も読まずに過ぎてしまった。…略…⁵⁶⁾

ならば、文学的「改心」以前の享樂的な生活は推して知るべしである。たとえロッピオが、アルフィエリの熱意と才能を目の当たりにして、彼への評価を幾分改めたにしても、墮落した若者としての認識を根本から翻すには至らなかっただろう。むしろ、後に検閲の任を務めるモラリストの目が、権威への反抗心を宿したまま文学の栄光に燃える若者に、より大きな危険を読み取ったとしてもおかしくはない。

思想面においては、「伝染性のおぞましい風潮」とロッピオに形容された啓蒙思想の影響にも欠けてはいなかった。確かに、後年のアルフィエリは、モンテスキューを例外として、若い頃から啓蒙思想に特別な共感を示していなかったかのような態度を示している。

…例えば『社会契約論』といった、その他のルソーの政治的作品は理解できなかったもので、読むのをやめてしまった。ヴォルテールについては、散文は特に気に入ったが韻文には退屈してしまった。…中略…反対にモンテスキューは、驚嘆と楽しみを覚えつつじっくり二度読み通した。おそらく少しは私の役にも立っただろう。エルヴェシウスの『精神論』には、深く感じるどころもあったが、不快さを覚えた。⁵⁷⁾

しかし、若きアルフィエリが彼らから受けた影響は、実際には上記の引用部分から得られる印象よりもずっと大きかったはずである。例えば、1777年4月19日の『日記』には、友情

の本質を利己心に還元させて説明しようとするアルフィエーリの姿がある。これはエルヴェシウスの唯物論的徳観の影響と見るのが妥当だろう。

昼食後、ターナが私の許を訪れた。私は彼のことを誤解しているのかもわからない。しかし、私に対するターナの態度が以前とは違って見える。もしや、ターナが私自身と私の優れた作品に嫉妬しているのではないかとの考えを取り去ることができない。そこで私はターナにいつも感謝しているよ、と一人で声に出してみる。しかし心の中ではふと彼を憎み始める。でも我に返るとそんなことはないと思う。そしてまた愛し始める。こうしたことの宿命的結論は、つまり私は、自分しか愛しておらず、他人を愛することがあっても、この獣的な自己愛に役立つくれる限りにおいてなのだ、ということである。⁵⁸⁾

ルソーとの共通点はより顕著である。アルフィエーリは『専制論』でイギリスのみを「専制政体」のカテゴリーから外しているが⁵⁹⁾、これには「法律によって統治された国家を、その政治形態が何であれ共和国と呼ぶ⁶⁰⁾」とするルソーの主張との共通性が指摘できる。同じ『専制論』にある「ヨーロッパを眺める限り、ほぼいたるところで奴隷の顔が見える⁶¹⁾」という表現も、『社会契約論』の有名な一文「人間は自由なものとして生まれたが、しかもいたるところで鉄鎖につながれている⁶²⁾」を想起させる。また、『専制論』以降の話となるが、暴君の秘密の暴露者としてのマキャヴェッリ解釈や、実定法を超越する力としての世論の認識にも、『社会契約論』からの影響を見ることができ⁶³⁾。すべてがルソーからの直接の影響であるとは断定できないが、若きアルフィエーリが『社会契約論』に少なからず共感を示していたのは確実と思われる。少なくとも、理解できなくて『社会契約論』の読書を放棄しただけではなかっただろう。

以上のような特徴を備えたアルフィエーリが、ロッピオ及びその周辺から「えせ哲学者」の予備軍と見られることはまず避けられない。『えせ哲学論』の執筆時期とアルフィエーリの最も無軌道な時期が一致しているのを見ると、嘆かわしい若者の一例として、それこそ執筆の材料にされていた可能性も高い。一方アルフィエーリの側でも、自分が異端児らしく振舞っていたこと、そしてそのことによって世間から危険視されていた自覚はあったようである。ヴィットーリオ・アメデーオ三世がアルフィエーリの祖国放棄を最終的に認めた理由について、次のように書いている。

当時の王は確実に私の思想を知っていて（私がその兆候を少なからずほめかしていたからだ）、私を引き止めるよりも行かせてしまうことを選んだのだ⁶⁴⁾。

『えせ哲学論』の発表以降、アルフィエーリはトリノ社会でいわば「公式に」危険分子とみ

なされるわけであり、周囲からのプレッシャーはより厳しくなる。1777年の5月にトリノを離れたアルフィエリがその出版の計画と内容を知っていたのかは分からない。しかし、政府や宮廷内に人脈を持ち、様々な立場の人が集まるサークル活動にも参加していたアルフィエリが、自由な知的活動を抑制しようとする保守層の動きを感じ取っていなかったとは考えにくい。一旦は自由を約束されたかに見えた雰囲気の中での逆行現象だけに、直情径行の若者が感じた失望と反発心はなおのこと強かったのではないだろうか。明確に告白されてはいないとしても、こうした保守的論調の高まりがアルフィエリをトリノから遠ざけた原因のひとつとして考えられるだろう。

6. むすび

1777年以降、『えせ哲学論』に代表される保守的論調はトリノで支配的となり、自由主義的論調もそれに屈さざるをえなくなった。「トリノ私的サークル」は1783年によりやく公式アカデミーへの昇格を許されることとなったが、それを間近に控えたサルツォは王への要望書の中で次のように書いている。

各人の間に必要な調和に関して、またそれと同様に、アカデミーで作られ出版される書物に関して、あらゆる不都合から政府を守るため我々は考えました。まず第一に、アカデミー会員によって扱われる題材は、数学上のもの、実験あるいは観察上の科学に限定をすると。それは、宗教や統治、あるいはつまるところ習俗に関する命題に、たとえ望んでも誰も取り組めぬようにするためです。⁶⁵⁾

かつて、歴史や文学や哲学上の議論にも開かれていた知的空間は、政府から公式に認められるため活動の範囲を自ら制限することを選んだ。『えせ哲学論』は批判的意見の形成を阻みたい政府の思惑と一致し、その精神は実際にトリノの知的環境の性格を左右したように思われる。トリノの知識人社会は、アルフィエリにとって居心地の悪い場へと確実に変化しつつあったのである。

しかしながら、こうした「居心地の悪さ」は、アルフィエリの創作活動にとって単なる障害でしかなかったわけではない。横暴に対する英雄の反抗はアルフィエリを常に魅了したテーマのひとつであった。とりわけ、トリノを離れた直後に構想された悲劇『ウィルギニア』と『パッツィ家の陰謀』は、被治者の「反乱」と「暴君殺し」というそれまで以上に攻撃的なテーマを扱っている。『自伝』では、旅行中にリウィウスとマキャヴェッリを読んだことが詩情を掻き立てられるきっかけになったとあるが⁶⁶⁾、それだけではこの時期に生じた急激な作風の変化を説明しきれないように思われる。トリノにおける保守的論調の揺り戻しにアルフィ

エーリが反発を覚えていたという背景を考え合わせることで、より説得力のある説明が可能になるのではないだろうか。自由を与えつつそれを抑制したトリノ社会は、アルフィエリという一人のアンファン・テリブルを期せずして育てていたことになるのである。

注

- 1) V. Alfieri, *Vita scritta da esso*, vol. I, a cura di L. Fassò, Asti, Casa d'Alfieri, 1951, e. IV, c. III, p. 199. なお、『自伝』からの引用文については、その邦訳である『アルフィエリ自伝』、上西明子・大崎さやの訳、人文書院、2001、を適宜参考とさせていただいた。
- 2) V. Alfieri, *Della Tirannide in Scritti politici e morali*, vol. I, a cura di P. Cazzani, Asti, Casa d'Alfieri, 1951, p. 363. なお本稿では、1777年時点でのアルフィエリの心情・考え方に焦点を当てるため、後に修正を経て出版された完成版ではなく、草稿版を資料として用いる。また、草稿には多くの削除・修正が施されているが、できる限りもとの形を復元するように引用等は行うものとする。
- 3) アルフィエリとロッピオの比較という試みは、ロドヴィーカ・ブライダの著書、*Il commercio delle idee* 内の小論に着想を得たものであることを明記しておく。Cfr., L. Braidà, *Il commercio delle idee*, Firenze, Leo S. Olschki, 1995, pp. 322-333. もちろん、アルフィエリの『君主と文学について』とロッピオの『文学者品行論』を比較して、知識人が権力と結ぶべき関係についての対立意見を示そうとしたブライダの意図と、本稿筆者の意図はまた別のものである。
- 4) トリノ社会で知識人がこうむった迫害の大規模な例は、1710～20年代にかけて進められたトリノ大学改革の過程に見ることができる。聖職者の免税特権と司法権を巡って教皇と対立していた時の王ヴィットーリオ・アメデーオ二世は、国の教育制度が聖職者に独占されている現状に危機を感じ、国家主導の教育制度の構築に着手した。中でも、教員養成の観点から優先的に取り組まれたのが大学再編であった。その際に、各地から招かれた新教授の多くは反教権的な思想の持ち主であり、1720年に大学再開時のスピーチを務めたラーマは、イエズス会による教育を厳しく非難している。しかし、1727年にローマとの協定が結ばれると、彼らの運命は一変した。対ローマ闘争で利用されていた教授たちは、ローマとの関係を悪化させかねない危険要因となったのである。彼らは新しい政府の方針に順応するか、大学を去らなければならなくなった。上述のラーマに加え、大学改革案の作成に携わったダギールはトリノを離れ、改革省大臣ベンサペーネもその職を解かれた。Cfr., G. Symcox, *Letà di Vittorio Amedeo II*, in *Il Piemonte sabauda*, Torino, UTET, 1994, pp. 416-437.
- 5) V. Ferrone, *La massoneria settecentesca in Piemonte e nel Regno di Napoli*, in « Il Viesusseux », IV, 1991, p. 105.
- 6) また、現政権から疎外された貴族たちもこの集団に合流することで、皇太子の周囲には政治的に不穏な集団が形成された。このことが王位交代直後の政治的混乱の一因ともなっている。
- 7) Cfr., C. Denina, *Il Parlamento Ottaviano*, in *Opere giovanili*, a cura di G. Marocco, Torino, Bottega d'Erasmus, 1980, p. 35. なお、定期的刊行を目指していたこの作品は、ローマを架空の出版地としたことで教皇庁およびトリノ政府の介入を招き、わずか一回分の出版で中止された。
- 8) Cfr., M. Cerruti, *Letteratura e intellettuali*, in *Storia di Torino*, vol. V, Torino, Giulio Einaudi Editore, 2002, p. 894.
- 9) F. Venturi, *Illuministi italiani*, tom. III, a cura di Franco Venturi, Milano-Napoli, Riccardo Ricciardi, 1958, p. 819.
- 10) 1778年には絵画アカデミーが再編され、1783年には「トリノ私的サークル」を母体として科学アカデミーが、そして1785年には農業アカデミーが創設された。
- 11) M. Cerruti, *Letteratura e intellettuali*, cit., pp. 894-895.
- 12) V. Ferrone, *La nuova atlantide e i lumi*, Torino, Meynier, 1988, p. 120.
- 13) Cfr. M. Cerruti, *Letteratura e intellettuali*, cit., p. 902.
- 14) Cfr., C. Denina, *Autobiografia berlinese*, a cura di F. Cicoira, Bergamo, Pierluigi Lubrina Editore, 1990, p. 46.
- 15) C. Calcaterra, *Il nostro imminente Risorgimento. Gli studi e la letteratura in Piemonte nel periodo della*

Sampaolina e della Filopatria, Torino, SEI, 1935, p. 79.

- 16) *Ibid.*, p. 79.
- 17) *Ibid.*, p. 78.
- 18) B. Robbio, *Della falsa filosofia*, tom. I, Torino, Fontana, 1777, p. IV.
- 19) *Ibid.*, p. 15.
- 20) *Ibid.*, p. 29.
- 21) *Ibid.*, p. 79.
- 22) *Ibid.*, p. 105.
- 23) *Ibid.*, pp. 81-82.
- 24) *Ibid.*, p. 85.
- 25) *Ibid.*, p. 62.
- 26) *Ibid.*, p. 65.
- 27) *Ibid.*, p. 66.
- 28) *Ibid.*, p. 301.
- 29) B. Robbio, *Della falsa filosofia*, tom. II, cit., p. 106.
- 30) *Ibid.*, p. 59.
- 31) *Ibid.*, p. 75.
- 32) *Ibid.*, p. 90.
- 33) *Ibid.*, p. 91.
- 34) B. Robbio, *Della falsa filosofia*, cit., tom. I, p. 6.
- 35) B. Robbio, *Della falsa filosofia*, cit., tom. II, p. 97.
- 36) V. Alfieri, *Vita scritta da esso*, vol. I, cit., e. IV, c. IV, p. 205.
- 37) それらは当時のトリノで公にできるはずのない議論であり、本人も出版するつもりはなかったのだろう。『専制論』はその後未完のまま放置され、完成されて実際に出版されるまでは23年を要した。しかもそれは作者の同意を得ない強引な出版であり、アルフィエーリは強い不快感を示している。Cfr. *Vita scritta da esso*, vol. I, cit., e. IV, c. XXVIII, pp. 331-334.
- 38) V. Alfieri, *Della Tirannide*, cit., pp. 349-350.『専制論』の草稿には、「暴君からその命を奪う (togliergli la sua)」という表現が後に「暴君から専制政体を奪う (togliergli la tirannide)」へと改められた様子が残っている。当人も不穏当に過ぎると感じたのであろう。したがって完成版にこの表現はない。しかし、同時期に構想された悲劇『パッツィ家の陰謀』では、反乱と暴君殺しがテーマとなっており、単に筆が滑ったという程度の話とは思われない。
- 39) *Ibid.*, p. 331.
- 40) *Ibid.*, p. 331.
- 41) *Ibid.*, p. 332.
- 42) *Ibid.*, p. 336.
- 43) *Ibid.*, p. 341.
- 44) *Ibid.*, p. 341.
- 45) *Ibid.*, p. 344.
- 46) *Ibid.*, p. 361.
- 47) *Ibid.*, p. 330.
- 48) B. Robbio, *Della falsa filosofia*, tom. II, cit., p. 161.
- 49) V. Alfieri, *Vita scritta da esso*, vol. I, cit., e. IV, c. III, p. 197.
- 50) V. Alfieri, *Giornali*, in *Vita scritta da esso*, vol. II, a cura di L. Fassò, Asti, Casa d'Alfieri, 1951, p. 239. このときの「原稿 (un manoscritto)」が何であるかは分からないが、読んで聞かせるつもりだった悲劇とは、翌日のサークルで朗読された『アンティゴネー』のことだろう。
- 51) B. Robbio, *Della falsa filosofia*, cit., tom. II, p. 78.
- 52) « Sansguignon » を「偏見なし (senza pregiudizi)」と解釈する説については以下を参照のこと。Cfr., G. Santato, *Introduzione*, in V. Alfieri, *Esquisse du jugement universel*, a cura di G. Santato, Firenze, Leo S.

- Olschki, 2004, pp. 12-13.
- 53) 『自伝』ではサークル活動の主旨が次のように説明されている。「そのサークルについて私たちは、頻繁に夕食を共にしながら楽しむということだけを目的に掲げていた（しかし醜聞騒ぎは一切なかった）。」 V. Alfieri, *Vita scritta da esso*, vol. I, cit. e. III, c. XIII, p. 136.
- 54) V. Alfieri, *Esquisse du jugement universel*, cit., pp. 65-71.
- 55) Cfr., V. Alfieri, *Vita scritta da esso*, vol. I, cit., e. III, c. X-XI, pp. 107-123.
- 56) V. Alfieri, *Giornali*, cit., pp. 241-242.
- 57) V. Alfieri, *Vita scritta da esso*, cit., vol. I, e. III, c. VII, p. 93.
- 58) V. Alfieri, *Giornali*, cit., pp. 241-242. エルヴェシウスの道徳観については、森村敏己『名誉と快樂—エルヴェシウスの功利主義—』, 法政大学出版局, 1993, を参考とさせていただいた。
- 59) V. Alfieri, *Della Tirannide*, cit., p. 331.
- 60) ジャン・ジャック・ルソー, 『社会契約論／人間不平等起源論』, 訳 作田啓一・原好男, 白水社, 1991, 47 ページ。
- 61) V. Alfieri, *Della Tirannide*, cit., p. 329.
- 62) ジャン・ジャック・ルソー, 『社会契約論／人間不平等起源論』, 9 ページ。
- 63) 『君主と文学について』第二巻第九章にあるアルフィエーリのマキャヴェェリ解釈「マキャヴェェリの本からは幾多の非道徳的かつ暴君の格言が見出されるが、(良く物事を考える人にとって) これは、君主にそれら実践するよう教えるためではなく、君主の野心的で抜け目ない非道さを人民に暴いて見せるため明らかとされたのである。(V. Alfieri, *Del Principe e delle Lettere*, in *Scritti politici e morali*, vol. I, cit., p. 182.)」は、『社会契約論』第三篇第六章にあるルソーのマキャヴェェリ解釈「マキャヴェェリは、国王たちに教訓を与えるような振りをして、人民に偉大な教訓を与えた。マキャヴェェリの『君主論』は共和主義者のための書なのである。(ジャン・ジャック・ルソー, 『社会契約論／人間不平等起源論』, 86 ページ)」とよく似ている。また、『君主と文学について』第三巻第十章の「世論とはこの世の明らかな支配者である (V. Alfieri, *Del Principe e delle Lettere*, cit., p. 247)」や「著作の影響というものは、それが健全な世論を刷新して確立させるために動いているときは、法の力よりもはるかに超越する (*Ibid.*, p. 249)」という主張には、『社会契約論』第二篇第十二章にある「すべての法のなかでもっとも重要な法 (ジャン・ジャック・ルソー, 『社会契約論／人間不平等起源論』, 67 ページ)」としての世論認識との共通性が窺える。
- 64) V. Alfieri, *Vita scritta da esso*, vol. I, cit., e. IV, c. VI, p. 213.
- 65) G.A. Saluzzo, *Lettera del conte di Saluzzo a Vittorio Amedeo III*, in *La nuova atlantide e i lumi*, cit., p. 144.
- 66) Cfr., V. Alfieri, *Vita scritta da esso*, vol. I, cit., e. IV, c. IV, pp. 200-206.

Alfieri and Robbio in 1777

—Uneasiness in the Society of Intelligent People in Turin—

Rui KANNO

Abstract

It is well known that Vittorio Alfieri, an Italian tragedist, departed from Turin for Tuscany to improve his Italian in May 1777. However, the author of this paper claims that the intellectual situation in Turin is another reason of the journey.

Vittorio Amedeo III succeeded to the throne in 1773. From that moment, the intellectual environment in Turin,

being liberated from the traditional severe control, was changed dramatically. However, a conservative opinion that immoderate cultural freedom should be restrained, continued to exist. In fact, the opinion regained strength with Benvenuto Robbio di San Raffaele, who published *Della falsa filosofia* in 1777. Since he was cautious of the current intellectual corruption, he emphasized the importance of censorship to maintain social order. It was in the same year that Alfieri drafted *Della Tirannide*, in which he criticized monarchic society that seemed chiefly Turin.

The contemporary appearance of these conflicting opinions doesn't seem casual. Robbio and Alfieri had not only participated in the same literary circle, but also Robbio had instructed Alfieri in writing tragedies. This means that they must have known directly other's attitude and ideas.

After the publication of *Della falsa filosofia*, Robbio got involved in cultural politics of the government. This indicates that the conservative opinion became predominant. On the other side, Alfieri decided to abandon his country for the freedom of writing. It seems that although not mentioned clearly, increasing uneasiness in the intellectual society was one of the reasons that Alfieri wanted to leave Turin.

Keywords: Alfieri, Robbio, Year 1777, Turin, Society of intelligent people